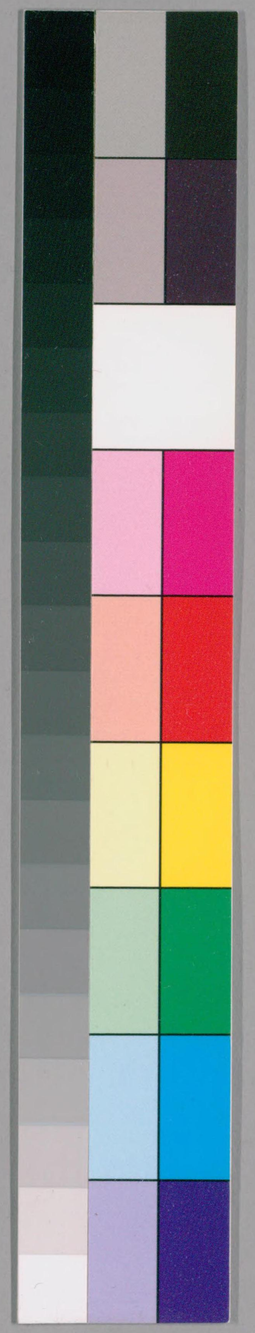
特 1
1965



国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965

ガラス使用

特 1
1965

秦名比河志

後集 下

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965

ガラス使用　挟み込み物

傍廂二編巻之下目録

千木鰹木
九穀
無住法師の歌
金の五色
船の名を何丸と云事
金銀鉄
西瓜
譏草
角生る馬
ひさごえの沙さど
飯豊皇女
鳥居
小兒真心の歌
酒のむ人
傀儡
無病長壽の灵藥
反歯
柳橋
可用不可用
麥秋
軍學の始
國府葦

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965

ガラス使用

國分寺瓦
甑　簟
笛のこちく
出芋大社
ねもり。やもり。とうみ
き
夷三郎
島織
尚歯會
火浣布
くひつこ
秀吉公の御目のむらさ
役行者が畜生道ふかつ
有情非情
かのが田へ水を引
かくの小兒の手習ふも
くもり
大盃
草字より真字ふ直ーこと
一莖二葉
むひそ
物いまひ

傍廂二編巻之下

藤原彦麿隨筆

千木　鰹木

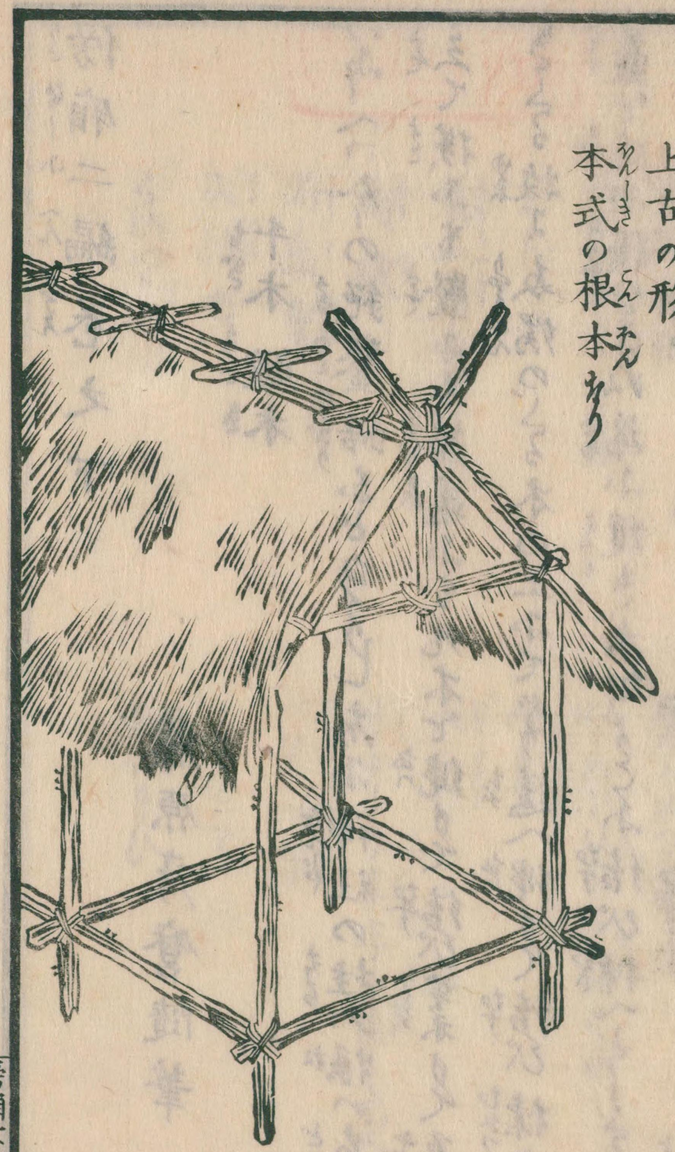
いにへの今の鉋鑿鋸ふどのりし方ふ神社の柱の根の出中ふ
うづも竪ふも筋違ふも丸木を縄りて結び葉りて屋をふ
きそうる牧ま萱端のうる木の上ふてやり遠へ縄りて結び棟包め
藁を風ふ損つまぬ為ふ組き木をよこふ結び押へうーうるがか
のづくうるを淺ましる木のえんは出うると棟藁おさえの横木
を刈ふ伯を附て千木鰹木とかくちをほりうるなり
とまいの上古いまぐ派鑿所絶ふどのあれびの造りさる多まび災時いそ

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

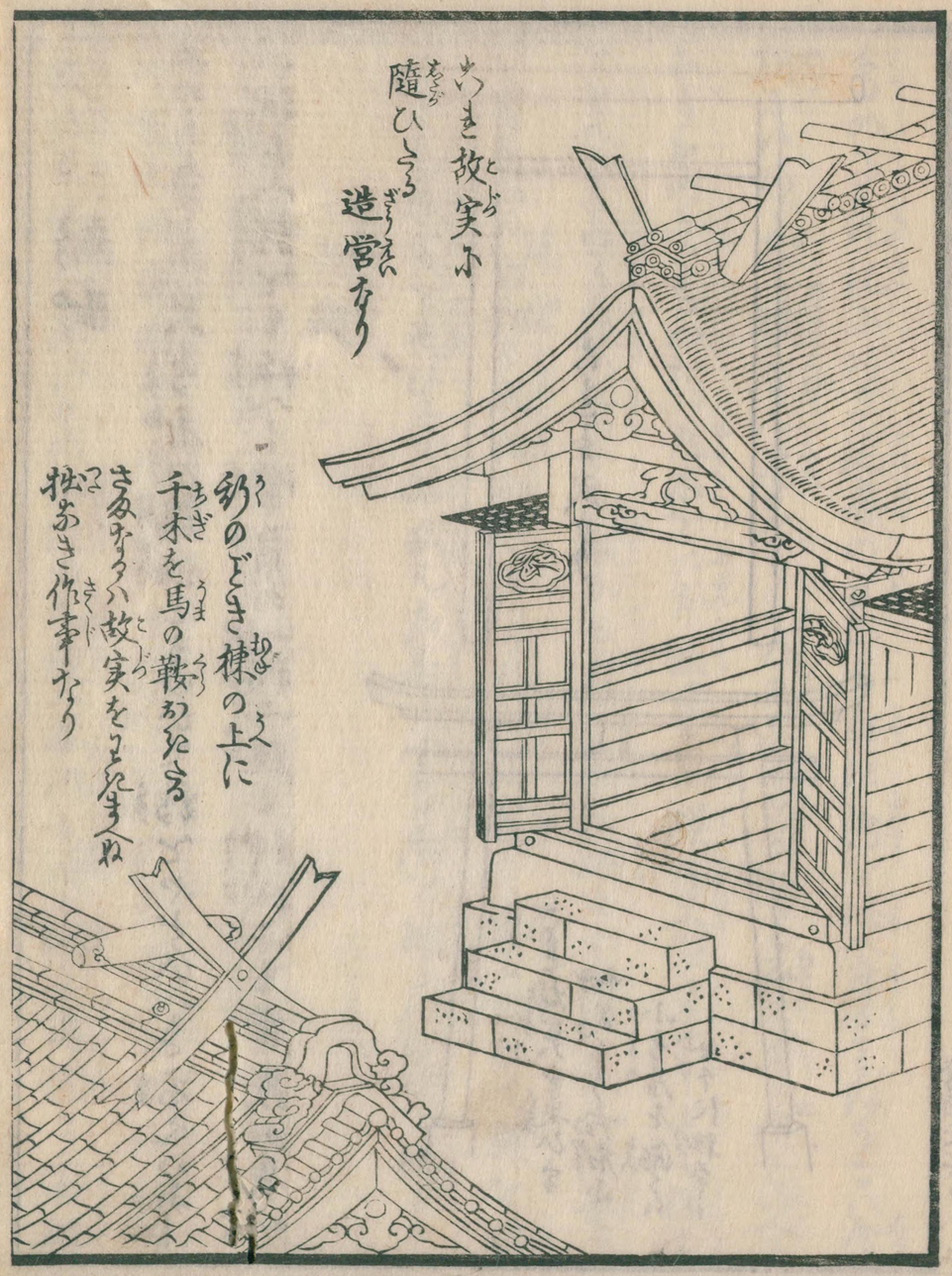
特1
1965

用ゐるまで故実のありとあらゆるを

上古の形
本式の根本なり



傍廂ヘニ下ノ



いまき故実ふ
踏ひろう
造営なり

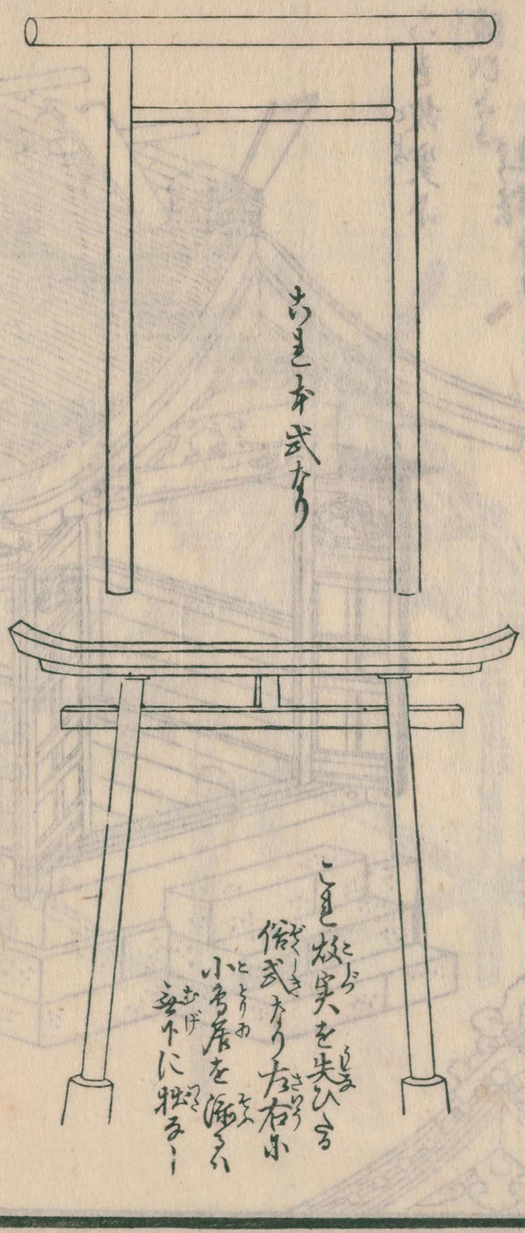
釘のごとき棟の上に
千木を馬の鞍おろ
さまざまの故実をりと
牧おき作事なり

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965

ガラス使用

鳥居

右のもろもろふいて多居い鶏栖ともいひて鶏をやどすべきまへ神おへ鶏とも彼へ幣帛の一種之脱ま神代ふも常夜の長啼



傍廂二ノ下ノ 二

多の多紀ふなり延喜の式ふも白丸鶏を彼へ奉るとなりこゝ食料ふいなるぞ暁告ん為なりその多の鳥居ふ丸木を二本立て上ふ横丸木をうちそへ渡せるもの社の前ふも横ふもあるもうちそへ門の如く正面ふのこなりて門と等し並ふ多ひて額を掛つる是故実を失ひる俗式之左右ふ小多居を添へむげふ拙し

九穀

皇極天皇紀ふ元年八月天皇幸南淵河上跪拝四方拝天而祈即雷大雨遂雨五日溥潤天下或本云五日連雨九穀登熟於是天下百姓倶称万歳曰至徳天皇云々この細注の九穀ふ谷川士清が紀ふ通證ふ黍稷

稼稲麻大麥小麥大豆小豆ことを九穀といへり又五の穀なり麥小麥蕎麥おべて麥穫麥おべて蘂の一種あり
粟小丹黍秬黍秫粱米おべて粟の一穀え米小秔稬おべて米の一穀え米小秔稬おべて一穀あり糝小胡麻荏
穀あり豆小大豆鳥豆燕豆大角小豆おべて一穀あり糝小胡麻荏
香蕈菫子おべて一穀えさまべ九字の五字の穀あるあり

小兒真心の哥

恵心僧都小大和国人ト部正親の男源信といひしえ台嶺慈慧の
弟子えこの僧都小佛道修行の外いなぐーまを深く悩む性なれば
なまこの兒の中よひとりふたりしより朋友の兒さえ若き
僧おどふたこけるを修行りてかの兒をとりそそ明日里へくさん

といひしを其かの兒小掾小泣ふして夜の更行まふほくと月
をえて「なふ結ぶ水よやぞまる月ぐのあるあれろの世ふも住うあと思
びやふひしを修行攻つみて感よえぞ肝よ入てさていふい俳意
をそぐは道心をもむるえそかの兒童を長く寺ふとぶめてふ
ろうもふよくあるわれよ」梶原平三景時が孫の云往法師がかきし
砂石集ふなり

云往法師の哥

さて又かの云往法師のふよ「我身程ふぶかふよふも
ふまんべーやい」よさふべものど心よまろせつと
よあり世を捨る心小いかくなるまりきるまぞなりける

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

酒のむ人

酒のむ人の小兒の耳きるごとく如く歡ぶべし
とあるめ眉ふ皺よせて一口のそれ下ふ至又のこてへ下よきくるげふ
のむさそのそ後よ常ふ飲やうなる人も俄よおくありてうそ
らぶもなり又ハをきよまる人も忽ふ手きふ病者の如くなるもな
ほ又記人よ笑く物も覚えぞさめて後も醉中のをとをあらびせとへぞそ
うぶ如くあり吉田兼好法師の法是ぐまふ去るいようもやひえ
たるなり俗よ乳遠ひ水といふるもゆ名きふたらびかふ虫ふてもお狂業
とも禍泉とも醪水ともいひ范魯公紀ふ云戒爾勿嗜酒狂藥非佳
味この狂茶とあるが則乳遠水ふてのめび虫ふなうぶろ義よ佳味よなう

ぎとハくぶ利類をあつめて物うげよのむる多あり兼好法師ハこの意を
よく綽ーあるべー

金の五色

和名抄金 古加祢 黄金也 之路加祢 白金也 銅 阿加加祢 赤金也 鍊久路加祢 黒金也 鉛奈万利 青金也 ともあり

皇朝ふハ神代上あるう鉄のこうりてなぐー金いあるう
ーあるさ名よ鏡 今ハ文今字よ多く鉄鏡あり 剣刀甲冑そ外農工商の器ふても鉄代
ふて青ーなぐー今ハ裝ふそ今銀いるをおうしてそ素盞嗚のそ天上
より下さめ人間よ神羅ふをえひてかのふ白ふよなうふ皇
ふもろもろせんふ浮宝おくいあるべうびとのまひて舟よ造るべ乳木を
始めなさ木稼を施ーあひう多神代紀よ乗くなう主後

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

仲哀天皇崩御の後　神功皇后淳こゝろづく神と成給ひ神系畢て
新羅へ遠征し百濟を蕃と為三漢を従へ三王を　皇朝の馬飼奴
僕と定め給ひ今銀を掘なまこの孫宝りてう給ひより今銀の鉱
出ると滋て　天武天皇の二年に對馬の國ふて掘て銀出ること
元明天皇和銅元年武蔵ほり銅出より銀を始て錢を鑄て和銅珍
開と号し年号を和銅と云　聖武天皇の天平九年陸奥ほり始て
黄金を掘る續きて同年後迄ふも金を獲てまるれり是
出ると充満して中ごろ新羅ほふ絶てまくありつてこゝやしげる淳のこと
そのうけるを皆神のうつぎ給ひ人力人智の及ぶべきまあ
らぞなおうとまあるまゝ

傀儡

傀儡ハ二格なりてハを紛り事物紀原列子通典梁鏡傀儡詩これ
らハ木人形之為まり出る箱出狂坊とハ又一格ハ遊女をハ下学集
本朝俗呼二遊女白傀儡一定家卿季経朝臣なおらの
ハを紛り字書ふハ傀ハ猶怪也又偉也大也美也盛也とあり傀ハ
敗也又心勞苦皃又不安定まどあまべ遊女まさるあるべし

私の名を何丸とハ事

私の名を何丸とぞくるゝ成人の祝ふまろハと鼻下の剃ふてこぞろ
のゐとまろとハくるゝ我とハ笑ふて後世俗ふハ拙者私などハくると同
名くさる故まこぞろの名を何麿某丸と称せも鼻下の称なると

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

淺ましい親ことその父刻まれて孫丸と云ひつる万葉集れ
ふかき小虫と蚯蚓丸蚯蟠丸などの人の和名抄まさまざま身の
守ことごとたのもしき人斂刀の頼ま小鳥丸鬼丸友切丸などの名なり
淺ましい親と絢が英称となりて小兒の名ま何丸と号けるぶ又淺ましい
高貴の嫡まと寺院の兒童ふのことなりて元下の少童ゆへ悩るまき
ものとなりふるう大松ま何丸と号けしも万里の波濤とゝろる牧ま命
ふるー名ゝを淺又英称となりてちひさき舟ゆへ号けざる事と
なりぬる又城郭ふ有丸二文丸出丸などつくるも英称ゐて元下の嵜
の構へなどまのつまねるものなりされば丸ゆ卑下より親愛ふ移ま親愛
より美称まろうるなりかふ有なるまとなりぬべ

無病長壽の靈藥

食料の最劣ふて不死の美菜の長ろ物ゆへ
有よりて飢渇を免のぐ為のことまゆへ大ろ
乳根を強くし腎精をまし力量をそへ手足を健ふいまゐ盛ある
米のよふ死ある皇朝人の長壽ふて武勇優まるも異国人の短命ま
て非力ろも米のよーふ一緒の食料ゐべての菜果ゐどいろのうまをしふ
も及ばぬ菓子まべての物版の上ふいづるまゐぞ仍れも十日廿
日一年二年ありて一命まかりべ米食ゆへ日ごとまざまざ元力ふと
久一日ろのぐれい大病人の如くこ日ろへきれば死人のごくそいと多く美
菜ふてぞなりける

金銀錺

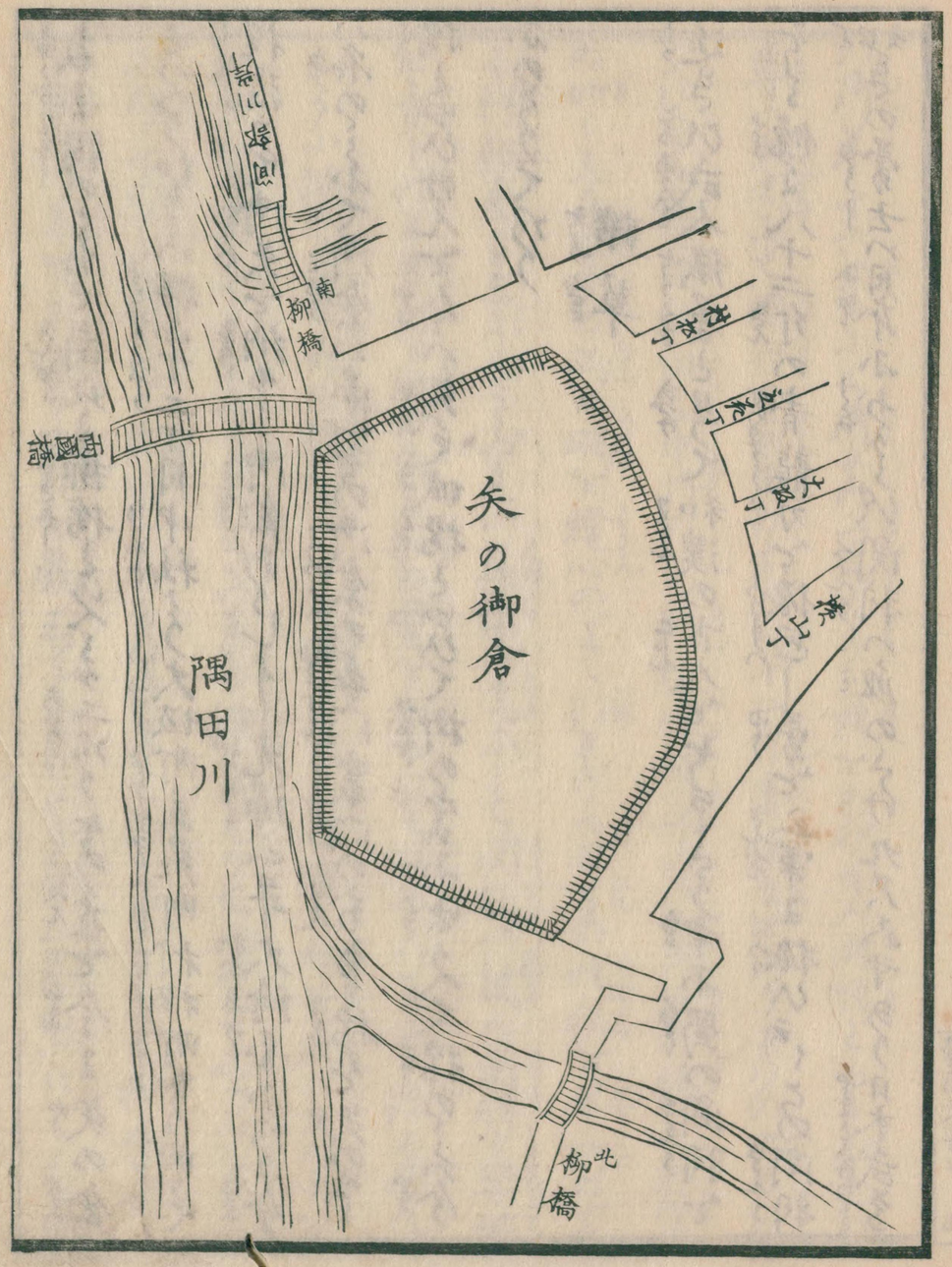
上五色金の條ふいひしげ如く武士の甲冑劔刀鎗の類農夫の鍬鋤孫の類匠丁の鋸のこ絶て斧の類をべて鉄そのこ用ひてつぐ〻今類を用ひざまべ金銀ハ脆ふのこ用ひて物の用ふさぞそ利慾のこ肯とする世こそしよう金銀の價を貴くせ君る今銀るき物とおり入れど物の用ふさる多く鉄の千分の一ふも及びされべる貴の世方く通用金銀いるふまさらべ鉄の鏡劔い類ときげて教ひるう

反歯

我初き比京都より伊勢尾参遠なりの小兒らが言ぐさふ源九郎義経い背低く色まく向歯反て猿眼と憑ひしこ見を頼朝卿の舎弟の

義経と必べらいふる祭えそい近江源氏の山本九郎義経が多え清和源氏と近江源氏と紛ひしこ山本義経い淺ふ右ら湧尉ふ任官なりしふる反歯の云湧と呉名せり判官義経い云湧ふあらべ撿非違使判官より伊豫守ふ経て左湧ふ少尉ふおそうえそのひ又波多野冠者義経とらく者あり三人円時円名あり一條良経公摂関ふおりしふふ三人の義経い名ふ改めし中ふ判官義経い義行と改ふ多諸書ふふめるの取おる因防宝人岩雲三郎義来とらく者摂政殿ふ仕へしひ判官義経参候おうりし時ふ兼末ふ孤膳の没そうくふおうりまで一向の小冠者ふて本曽おぐいさ多うて最優ふ京おまて年頃い二十だろふて色白く面長ふて髭も

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用



なく折くい上の方をえあぐる癖なり呉好色ふかくして美女を愛せるよし
かの兼末紀しるせり我その出いまだ見えず

西瓜

西瓜一名寒瓜とも又西域より出る故ふるき西瓜とも水中ふ冷し食ふ故ふ水瓜とも今い西字を水の音ふよめり五雑俎ふ大元世祖皇帝征西域之後此種入于中華一代醉四十云五代史契丹破回紇因得西瓜如中國冬瓜而味甘丹鉛餘錄ふ擾此謂西瓜五代始入中國故本草不載水東日記ふ西瓜自大元大祖征西域始得云々とぞえり

柳橋

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

表玉橋のこなた南北に柳橋といふ二ツの橋
とゝもむかしは横山丁二丁目中程より大坂町立花町村松町を曲りて
橋際まで御矢を納めし御倉ありしより元柳二年大綱等ふなり今
は名のみにて御倉はしらず其御倉の表門のお多橋を矢の
橋といひけんを今は矢を城橋といひて柳の字ふさふしからず
ふのやうてなり

識草

近き比或人織まとをもて和漢の古人をそのまとうの中小蜀の関羽を
そう像は八十二斤の青龍刀を振ひ一軍を振ひたゝらの関羽
如きの勇士は日本ふかゝる比関羽は疱のやうけ九尺五寸あり日本武尊

御年十六歳にて御ともし一丈ばかりの人関羽とうつぶきば
尊は大関にて関羽は前角かあり八十二斤青龍刀をふるひ給ふ
ふるひ給ふ新田左中将の臣篠塚伊賀守は八尺の疾の槍を苦笹
の如くふり廻し一万釣の碇を楼心のごくふりさげ九五るの帆柱を竿竹のご
く押折をこまふくふぶまび篠塚は虎ふて関羽は鼠と関羽が樊城
を責しは曹仁が放つ矢は右の臂を射られ疾をぬきふる疵の療治
をふ酒のこ暮打て呑べうと自慢とをまこと権五郎景政は左の目を
射られふそ矢ぐるぬきつまこと疾のふてめげざるを三浦為宗
ふめつせつふ張力のう為宗がまめかみて額は足をふみて抜んとせ
ふ景政ふて為宗ふ不礼を厳ふくまぐめふふ三浦の小児も笑る処

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

おう関羽が酒と碁とを甚だ愛して首を絡つて
景政が関羽よりも二十日ばかりも長うべし
も宗祇法師が髭を香をとゞめし風流ふかく及ぶべくもぞ云く関羽勇ふ
修めて敵を亂軍と雖れども却てうばう
ふかうと首斬らるゝとも云くその容貌焔魔小紙ども
造り絵書して折く箱代の奉加なかるべしと云々

可用不可用

人のその筋く通くふかうして賢愚巧拙あるもの
器の如く絶ゆ削る捨ゆうきり鑿い穴をうがつ
性とてなぐるもふかい用ひざる人もその性またがるもの
ら じ楠正成卿の名杉本先生清扱持遠風おどろき大功をなげさ
そあぐるもふかい用なる人なるべき世ふ物の用ふたぬうのけものとい
い用べき折ふ用ひぞあぐるもふかい用ひんとする方ふて強ふ木を削れ
絶ふ本をうきまとゝいふが如く一つうつる人のその任ふなるぬい仕人の
眼のうつる処ふて弃瑕録ふ用則天下無可棄之人物責短求備則
天下無可用之人物といひし実ふさるもふぞありける

角生うる馬

新田義興の霊角生うる馬ふのりて江戸遠江守を縁伝うるは太
平紀ふあり寛永のひ江戸ふ後馬ふなりて耳の下ふ長二寸余の角生さ
うをて阿部對馬守重次判ふ角一双をとりて
日光山の御齋庫ふ進

呈ㇾひろ林道春大人の文集ふなり太平記あるに幽霊ちかひおぐるをみていあるべうび前漢書五行志景房が易傳曰臣易上政ニ不須厥妖馬生角成帝綏和二年二月馬生角是時王莽害上之前自此始かく外戎ふていつうるぬためしとせり

麥秋

麥秋といふに五月のひとり秋ふあるおぼつかなくて麦のこのひとを秋ふいひつるなり野客叢書宋子京有皇帝幸南園觀刈麥詩曰農扈方還夏官田首告秋注臣謹按物候謂之秋取秋斂之義故謂四月爲麥秋禮月令ふも麥秋至となり明詠集ふも五月蟬聲送麥秋ちふ史木

集ふ「おくて」ふ稲のまつ熟ふるをもまつをもそれが秋いかりの約ふてありいはうむとふ義ふ

ひさえの むさご

更科日記ふ我国ふ七ふつうちを名ふる酒壷ふさしてえのむさごの南風ふみびき北風ふみびき東ふあびき東ふけび西ふあびくとえてかくてあるよとひろごちつびやきけるをみくこのひさごい後ふ梅枝ふ扱ふておを汲む器ふ歌ふ本行ふどの柄つふとれいひとつぎふありふる歌ふて俗ふひ事くふべとえ物ふ瓢ふ器ふ形ふて柄をつけふうい

杓の如くある

とひきえといへる垂柄ゐて
見をひきくろくべきにぶび春くとも
すゐ実ありてる夕なりきて上よ七ふつりを春ふるこゝ
ゐ假名ゆてちらこゝあるを見誤ゐ
なまことといへこえさるを七ふとうえて清少納言のこうろふろうといふ
ひーと同ド文格のようふ又ふいを初ーかゐいに有情の鳥がおる是先
ぶちつぎくゐ春ゐを見てこ春りに春りせはしそをゐるそ
非情の酒壺ふてつろ居ろのこゐ
らべ夕めべーセふていきふふをの
誤なゝん

軍学の始

續日本紀廢帝の淳仁代ゐ遣授刀舎人春日部三關中衛舎人土師
宿禰関成等六人於太宰府一就二大貳吉備朝臣真備一令習二諸
葛亮八陣孫子九地及結営向背一云々まゝ同紀光仁天皇御代
小去天平宝字八年真備生年數満七十二其年正月進二致事表一
於太宰府一訖妹奚之間即有二官符一補二造東寺長官一因レ此入京
以病歸レ家息仕進之心忽有兵動急召入内参謀軍務事畢
投功因此微労一累登二貴職一云ゝこの公軍学の始ゝ霊亀二年唐玉
ふゝろう経史をゝろう〻軍術を学び緒芸を洽て服朝ーゐう官
位ハ正二位右大臣ゐ昇ゐ齢ハ八十ゐ来ゐて宝亀六年十月薨給

ゝ物語ゝるひとる公ふてぞもゝしける

飯豊皇女

武烈坊矣慶が一ゝび女ゝ逢てゝうべうべと岩ひ宅めて再び逢ゐを欲せぎりしと世のゝ云稚ゝ綿ゝ
へゐまごさゝるゐ実ゝありやゝあらべうべ書紀清寧天皇三年
秋七月飯豊皇女於二角刺宮一与二夫初交一謂人曰一知二女道一又安可
異終不願交於男一云々ゝゝゝ稚ゝらのさゝとこふもんなゝしける

國府墓

下総葛飾郡国府墓ゐ里見の赤ゝ代ゝ伊勢北條小責ゝらまゝふ已

小下総國国府在二葛飾郡一と書をやその上ゝ国府ハコヲ鴨ハコウ
ゐまべ音聲ゝぐべう

國分寺の死

ゝぐド
ゝ分ゐのゐ上巻ニふゝぐゝぐまゐの虫もその虫府ゐなりしその
跡の古き死ゐんとゝ好事の者ゐて尋ね出ゐゐゐまべまゝて武
蔵ゐ府ゐ大ゐ戸より近け里べゐふも更ゝゝまふゝてゝゝゝ北ゐ近
き須ゐ好事の人ゝ分ゐ跡の行ゐの中ゝ極て古死の欠損ねゝ所
ゝ入ふてみつゝゝ出ゝゝゝもて法ゝゝれゝゝ大師河ゝへ参ゐ

んとそかの花ともてやんもてづつけまつ
て愛めて重てさて大阿ま来んとそ訪ふ
きず二人だろかの花を愛めて重と余所ながら
人々のまろ小訪ふとろひろの二人の姫ま人
へ指ろ人ろろと見てもえろ人の待ろろ
処極てえて考くありしとえてきそそくやう
ろりけまそくいいず命つんそれまでいえまそぬよ
しきろやふなん

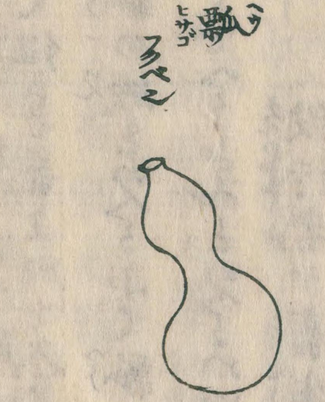
秀吉公の御図のひろ

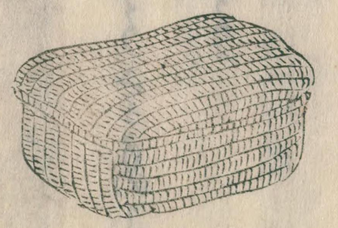
秀吉公いまず木下茂吉といふ小大沢ろ
水と陰合せ給ひしふ

主水眼ろこそ向ふや社びろぶさ又将棊筑前やの時
小志豆ず嶽小て佐久や雲萬丸とやうこ
疏ぎろしつるやるど人のろろやあ
矮陋面色黧黒無異表但微覚目光閃々射人ろり

歟簞

歟と簞ろへ別物小て一物小ろびし一簞の食一歟の飯とい





字書に
盛飯器以竹
為之

竹ふて組る器よ放を入るを一簞の食といひふくべよ入る漿
を一瓢の飲といるふて瓢と簞とふ物をいふ
瓢のことをへうえんといるいにしき誤ちる
役行者が畜生道まおつ
役行者ゟ伊豆ゟへ流刑の後かのゟふて死て十年を経て後ふ道
昭といふ僧が唐ふ渡ふ五百の群虎出て彼道昭を礼拝をゆ
一虎が云く吾ハ日本霊異記ふ云く日本ゟ渡ふ後
世ふて元亨釈書ふものせるゟ小角ハ葛城上郡茅原村の土
民のまふて狐つひえっかけまくもかしこき一言主大神を縛るおどく
るゟ鼻強弱をも弁へぬ愚俗の妄談ふてそれふても差一ふ入るを

かるひ合そべし

篥をこちく

ゟふ小笛をこちくとよめる字音ある
方来ふひろけまくもかしこき大和物語ゟ「ちの祝ハ詞の
ゟ笛竹のこちくのこゑもきこえこちくふ奥儀抄ゟ「のつゝ又こち
くなるべき営のさへづりそもしゝものふえらこゝちくと笛竹をゟのむる中の人いきらん書経註ゟ
周礼所謂孤竹之管竹特生者ゟまるよろ出ろ

有情非情

人ハ更ゟ鳥獣虫魚を有情といひ草木砂石の類を非情といふ

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

いとゞきひがことあり利鈍巧拙の差別いまゝで有情あるべきぞ
多數虫魚いさゝくしてまをむさゞるべくしてさるをおけまべき處ふていわ秋を挽めてかまりおゞくちひさゝ蔓草の類いまゞるべきなよりをとゞ松てのびやくと淋情のつぎあるべんやいわ石いまゞ
松きあまたど年を經て強大ふたりいわ純く
なゞ金石木竹の類工匠のまふて器ともたりうべき物皆有情あり
こそ淋情の物少いまゞせのまるべんや

出芽大社

丹波国桑田郡出芽郷ふ大社なりて聖海上人くまゞこねてまる

傍廂二ノ二ノ下　十六

そこるまゞきまふくまふ出芽とふくまゞ名ふ
移一建る社なるべしさるふても出芽村ふ出雲のかり文字ねゞ
望ふたる芽出る所の名なりやそるべ

おのゞ田へ水を引

俗言ふ身猜ふあるをおのゞ田へ水をこゞ
出ふるふてむりもなりしまゞ孝徳天皇紀ふ詔曰其臣連等伴
造國造各置已民恣情駈使又割國縣山海林野池田以
為已財一爭戦不已或者兼并數万頃田或者全無容針少地
及進調賦一時其臣連伴造等先自收斂然後分進修治宮殿
云々むりかるまいありしね所ふさる勅ありしね後京極良経公ふ

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

山田の苗代水のうくるうつや人のこゝろもあるらん 碧玉集ほ
けものや皆もべくるきの海山を我も顔まの民のあるそへ

ねりそ。やりそ。とうげ

和名抄ほ 蝘蜓一名蜥蜴一名蜴蜮 本草云龍子一名守宮 唐韻ほ 蠑 敬注云常在屋壁故名守宮也とあり
らもとうこれをとみてそへべ蝘蜓ねりそ
とうげのそし水中ほ在て堰堤の水を守る家れ
雛壁のるゝ小石をほを玄ぎ石垣のるゝ
ねごふ居るを處蔭とするべ 今世男女の中のるまつきて水中の
ねりそを黒焼ほ製そそりへるふ蜘ふべるまべ 陶弘景云蝘

蜓喜縁二籬壁間一以朱飼之満三斤殺乾末以塗女人身二有交接
事便脱不爾ほ赤誌故名二守宮一ふ毒虫ふて然りるもの
ねごくとうげほ笑羅ほえてやりいきこうげほえるものへ
小魚と同じさるふ小児もとくへて小器の水中ほ月並くるねり女の
ねほめるふ今のやりるべ

かくの小児の手習もじめ

今世小児の手習始よむらへ雑波津 難波津
ハ句へど散ぬるをこの句を手習の始るふ
ねりかくふて小児の手習始ふ
上大人丘乙己化三千七十士

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

尓小生八九子佳作仁可知
礼也

この二十あまりを習ふと猥に将ふなり

まし

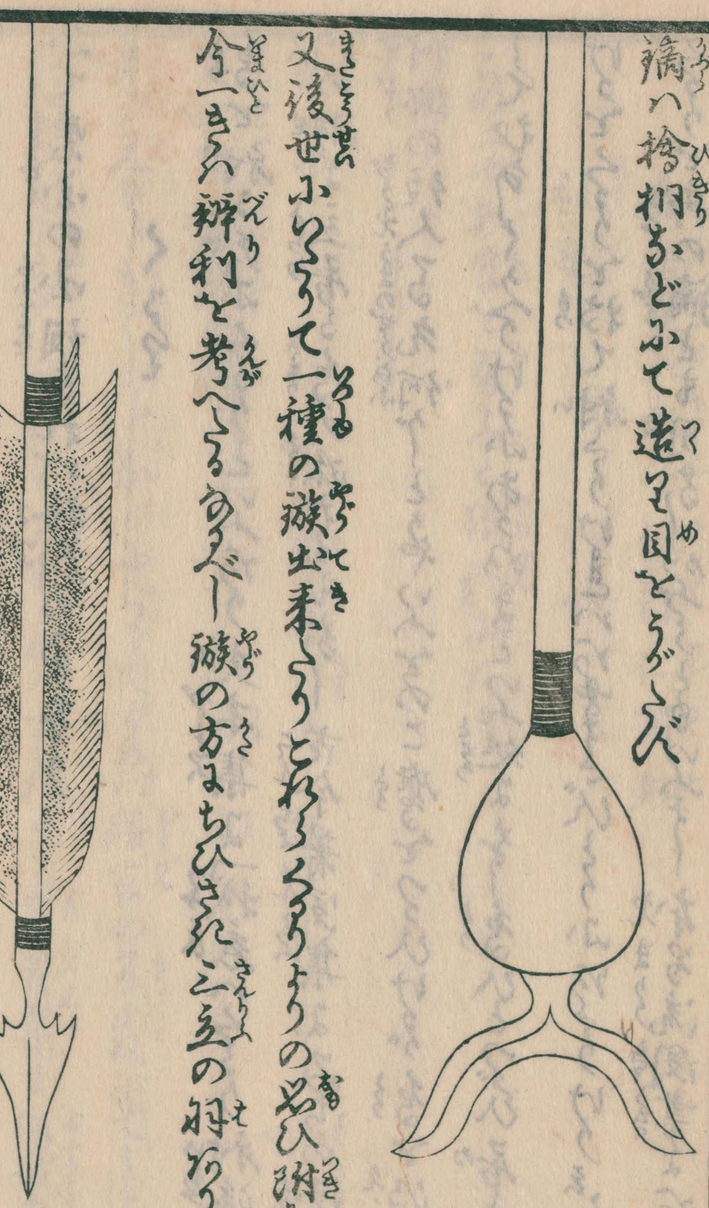
ふるまひかへしまし〳〵ぬぎまし〳〵みどよめるまし〳〵将行将
返将見将聞の将ふてきそよもも学のあえさるをもまでかく
までえまでにきくまでおどゆごうてよろべ俗言の多ふてうう
のたがひてをるい師翁も玉あられふつれう累璧集よ結城乃閑
「きりぐすそこをさせうあぞえのもの月のもまでき閨のひまろへとよう
いふれふなぐうやまでにきといふゆてさびて牧の齋明天皇紀よ御ふ

の中ふ倭須羅慶麻自珥とかうさとまでおくりける者ぞろいうまき万葉集ふ「垣ごえをえ
ふて栗毛の馬ふ鞍おれべ格別のうまり

くうを

多を射る矢ふくうとふなりまき万葉集よ「我恋ふくう射流ひ
川の瀬ふ立居る多の跡もうもあり古今著聞集よみちの玉田
村郷の往人る元何ぐとやふふをのこ麿をつひけぐ多と泊ぜ
してむのくうけるふあぬまとふ処なを多ひとつび居う
けるをくうを打て射くうけまべなまさびとうふなくうけりをく此
くうと舟の揺とも同あり「かぐら流図書よなり

鏑ハ拇指などふて造る目をうがつ



又後世ふりそうて一種の鏃出来そうこれを
今一きハ鏑利を考へるのべー鏃の方よもちひされこれ
の羽なり

夷三郎

傍廂二ノ二下ノ 十九

拾玉集ニ西の海ハ風こそせよ浪のうやまびのふのやえびそさへ
らふとかこへハ搆深き武庫那辺神をよるふてさふらふ待候
伺守ぶの云ふてうづひやかり居るうへきこと
三郎敬とあるハうつたるを近きころふハ夷三郎ハ夷三郎
人なりつの世の縁起をうんいとくをうきみぞなりける

大盃

大なる盃を武勇神とゐるハ古き作法節用集大全ニ酒盃大
者曰武蔵野也言野見不盡之意也とあり野廣けまべえて
かぐれを呑つくしぐれよふのひとも吉原伊勢物語とゐへいやしき
紙ニ此坐ふハ上戸なりそ大盃出さんうんぬ男うびて「武勇神ハけ

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965

ガラス使用

つなぎそ大酒る妻もこまわり云〻手後奉めのぐも
が川汚ふてもそもそびつる蜂龍蟹の盃も大器そへ盃をさん酒を
のむ者をさるむとつへ芙蓉の並木のもそ深む瀬
とつひーなりそふも大盃くさぐ江戸より京坂をみ十三の盃い
づもそ処の廣狭猴淋よりて盃の大小深浅をとろちろし

嶋織

後世結布など竪筋横筋やさへ格子筋みどを書織とへふう
つてる誤なり采覧異言應帝亞篇云按有二サントメイ西有二チヤ
ウル皆属部也洋舶所二載来一有二各色間道緞布一係二両地名一者
其所産也圖説チヤウル作利丸兒サントメイハ今の桟留おてチヤウル

ハ今の茶字えいづもも竪筋織るを海外の書ふよりつてしし故ふ
筋を書へ誤てるなりけり

草字より真字へ亜しへ

武御家の御定法へ誤とありつて古本より写来りるを改むるも
あく鶴の字を後よ露と云ふて真字ふ亜ーひがめて靄とうて
今よ改めるるめ御家風なり芝露月町の天水桶よふさろーた人が
芙字へ亜しへて露月町と云ふるやなりそ外ふも云家といふる
職の人ハ多く云学ふてへ出るやのこをへびかへひが文字をまへ
かくへるなり

尚歯會

おくらの月 嘉永四年十一月十日 梅本為山の徴ふて亡母の八十賀延小尚歯舎
あり七叟の仮同百十紫廓翁九十紫彦麿八十紫承こ八十六紫
月窓七十七紫武清七十六紫綾瀬七十紫
しむり宝永元年谷中感應寺隣の空地庵室ふてなりし尚歯舎
の会年八十叟幸庵百十七紫狩六叟八十
幽軒八十賀宴の尚歯舎の七叟八志賀随翁百六十七小森雨秋百三十六
古結宗見百八石寺宗春九十七下條七兵衛九十一谷口一雲九十一岩井
亜八十三又意保十一年大道寺友山翁尚歯舎ふ八志賀随翁ふ出席
狩六叟八名洋ふ〳〵又千氏名春の人ふ
志賀随翁ふ先ふ教ふられつまどをふ小出勤布ふつ百九七東市ふつ

百十八石井勤布ふつ百三沼田休義百一小林端中ふ殿九十二紫雨十布ふつ
九十二下條七兵衛九十二これをふへいふ承安の比友系清輔朝臣六十
賀ふなりし尚歯舎ふ八十ふ上ふ敦頼只一人ふて源頼政卿七十ふ上
そ引ふ多く七十ふ下ふそふ絵巻物ふ乗〳〵なり

一莖二葉

弘化二年乙巳春より夏秋ふて雪ふ候不順ふて寒暖定ま〳〵ず
雨ぐちふて折ふふ中き玉蜀黍出来ふ戎ふ長さ尺余大さ経ふ
寸余玉ふ小柑子栗ふどふ如きなり又一莖ふ蜀黍ふ五集ふ長ふ
て尺大さ経一寸余玉ふ柄数ぐちふあり折〳〵ふそふものなりえさ
ふ我園の物ふ出る中ふその年の八月一莖二葉ある芋と當

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

と出来りその葉今小取て魚けり

火浣布

火鼠の毛を以て織る布は汚れるはゝ火もやみべ垢のこやけて布
いそと称ぞといひ来まどもそのくろくみて宝らべ和名抄
小火鼠比称須三取其毛一織為布若汚以火焼之更令清潔
とあり異録ゝ日南北景縣有二火鼠一取毛為レ布焼之而精名
火浣布ゝ捜神記ゝ崑崙之墟有炎火之山山上有二鳥獣草
木一皆生二於炎火之中一故有二火澣布一云々その外本草綱目神異経
斉東野語夷珍賦考晋書等ふなど図し説ふれば畧けど
述異記ふい南方有二突火山一四月生レ火十二月火滅火滅之後草
木皆生二枝條一至二火生一草木葉落ゝ中國寒時也取二此木一以
為レ薪燃之不レ盡以二其皮一績之為二火浣布一云々かくまもくふく

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965

ガラス使用

定うたゝび近き比栗毛ふて毛を鉄盤の上より垂て鉄槌を揮ふ打ぐみ綿の如くやうゝある毛ぬるゝと糸ふようるとやきうるふ小今ゝのひうなりやまいとつれとやけぞそいろ有るみそうん
きる石掌ふなりやもりやまゝび

もゝり

今の世の人の細ふ利より内へ入るをもりとて犬猫のたゞひまひ引る細あゝびしまひりの家の門口のるゆて
後撰集ふ「妹が垣のまひうなとそるまゝ返入のるとし
堀川百首ふ「栗の家のまひうの庭ふゝ蚊火の烟うゝれ夏のゆふ
ゞと古事紀ふ大年神又阿須波神波比岐神とある阿須波ゝ

庭ふ波比岐ふ波比里ふて門口ふ万葉集ふ「庭中の阿須波の神
ふ小栄ゝ我ふ斎ゝんゝ来まそふ祈年祭祝詞ふ井の神を祭
る処ふ生井栄井津長井阿須波波比支登御名者白氏辞竟
奉者云々とありて門の入口ふ波比利とゝまり

くひつこ

初春の祝物のくひつこといふ春の始ふ食て菜ふるべき物のこれ
あつめて客もゝ物語ーふぐうのまゝこうゝ配膳
いふくるなり今いふのゆゑとしておま菜をつめまどむうふ配膳
とゝひて糯を爆て孝要あるふ天明年中比までふ元日平朝
より江戸中配煎賣あまふなりきーをつぐゝる絶て御九の内のこ

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

あまさかなどきこしをそまも寛政のひとやうやうくもてきたりて今
八稀ふうとなりく者あり是喰つゝ重ね料理その喰様最
よふ古器をえ出し食ふにつゞら煎焼てくさ〳〵米と果菜の最
第一ときゝ論ず及び皇朝入の長寿ふて武勇強力の外戎人の

緩急ふて柔弱非力あるい米の昇味の濃淡功能の精麁ふよ
まその外栢うちぶり梅干密柑乾柿
小松橙九年母枇杷神る藻ホど皆壬毒有物のふて初春の
菜ふ用ぺきものゝ本草綱目ゟ乗
と今いくらぬ物とありうふをうーさ
づくふそうらーけん当世いくらぬつこ
きゐを幼児もくらぐで悪をやはくうものの
物いまひ
物いまひいおきとよきゐふひくゐるゐ今後ゟ御幣うぎとそむ
う人もさるゐなり苦い悪ゟうへ吉ーて芳とい顕仲住吉百首

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』 請求記号 特1-1965
ガラス使用

特 1
1965

「汙る汐苔よ絲入演萩いよそ
なりとびえて相模集よ「きえ
の実と人いうん又伊勢内実の忌詞い物つ
て稲魚を忘方よ忌詞をつくれうもの
つまひふてうとびきのこいひてうふもいまもきみいそれざう
しきるけふや死い正位位よのやう齢い百栗よつう家かとそ書籍
器物ふまうせて義めもてあそび性なきよう
く容顔をぐれう妾二人いかくみをかく
ふてぞなりける

傍廂二編 巻之下 終

官許 齊藤氏藏板

万延二年酉孟春

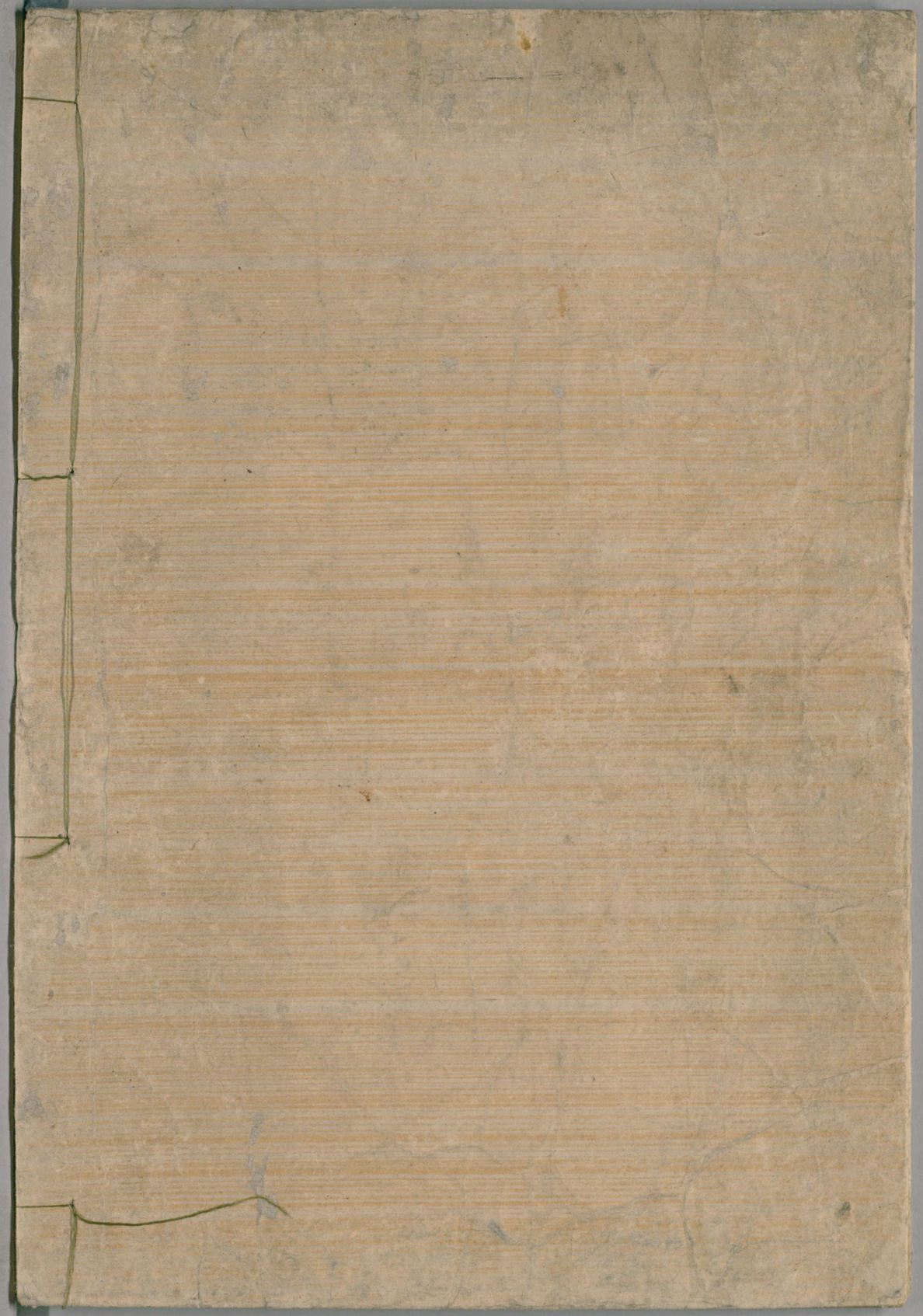
發行

書肆

大坂心齊橋博労町 河内屋茂兵衛
同 久宝寺町 河内屋源七郎
同 心齊橋南江壹丁目 秋田屋市兵衛
江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
同 通貳丁目 山城屋佐兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
同大傳馬町貳丁目 丁子屋平兵衛
同京橋弥左エ門町 大島屋傳右エ門

国立国会図書館　タイトル『傍廂 6巻』　請求記号 特1-1965

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『傍廂 6巻』　請求記号 特1-1965

ガラス使用